



田鍋氏著主戰論  
根津一氏對露主戰論

特別  
14  
2090  
(13)





田鍋氏著之我論目次

- |     |               |
|-----|---------------|
| 第一章 | 平和的處分法        |
| 第二章 | 滿州占領の由来及將來の發展 |
| 第三章 | 日本の國策         |
| 第四章 | 對清韓政略と滿州問題    |
| 第五章 | 非滿韓交換論        |
| 第六章 | 植民地より觀察したる滿州  |
| 第七章 | 彼我兵力比較        |
| 第八章 | 日露努力今後の變遷     |
| 第九章 | 戦後の處分         |

第一章 平和的處分法

一 先づ兩國と一々全軍撤兵せしむべし

鉄道線路内にも露兵の残存を許さず

二 清國の主権を回復せしむべし

以上の二件行はれしと上より清國政府より迫りたるの

要件を遂行せしむ

一 滿洲を列國に開放せしむ

二 露人の爪牙たりし官吏と更迭せしむ

三 滿洲の防備を嚴にせしむ

露兵を多く我軍と容れざるは、是より戦争の已むべからざると思ふ

第二章 滿洲は領土の由来及今後の發展

1) 西の國に侵略の回あり (2) 其侵略する方法を強忍あり

3) 其侵略の方向を北より西へ移す由り中亞細亞より東部西

北に滿洲の方向を向へり

○東部の影響を思ふの地心より北へ千八百九十一年西伯

利亞に建設の事確定せし以來國力と此方面の地位との互

なり

○滿洲は領土を侵略の第一着手、次に支那朝鮮及び

がごとく

才三子 日本の國策

○維新の革命を對外務部の結成しこゝのあり  
○その後彼とん明治六年の征韓論起り  
○征韓論も及對露も附す所と時機同然とて一も當時  
互に事と記さんと欲し一も國力培養後と行くとよき道  
きた  
○内訌湊定後の政策を想て國力培養と宗旨とを  
口而して培養したる國力を一とひ之と共七八年の役を  
用ゐるなり  
○ふちや之と協約同然と再び用ひへる時機と海軍あり

才四子 對清韓政略と滿洲問題

清韓兩國を常と就と關係同心の行動と為さしむ  
とあり

○此目的と遂げんか為る必要あり他覚たためし

一 内部の經營

要て保く強國と結ぶなり

清韓の内部は多くの人と入せしむるなり

種々形には東京を京に京を京義の諸條と獲

ぬし、且ち京義保と管口一並長するなり

清の強んを福建より九江武昌杭州と海路

を殺るなり

ニ 外部の經營

要て保く強國と結ぶなり  
要て保く強國と結ぶなり

口不海<sup>東</sup>支那海の西翔後と判するに非り  
此目的と違せんため海軍と海軍とを  
併しとせしむる事あり

一 我國策の遂行と氣も神と衛官の免

険多き一回の海軍と破るに足るべし

二 同上の二國連合の海軍と破るに足る

べし

三 支那方の最大海軍國が東洋の派遣一均

へき海軍と破るに足るべし

四 東洋同上の二國連合の海軍と破るに足

るべし

三 滿洲を以て清神二國の母とす新海軍

此れを以て清神二國の母とす新海軍

四 我國の海軍と清神二國の海軍とを併しとす

五 我國の海軍と清神二國の海軍とを併しとす

六 我國の海軍と清神二國の海軍とを併しとす

山あり

### 第五 非滿韓交換論

滿神交換の不利

一 我國の農産上自然の進路と塞かざる

二 露の海軍の強弱の故と行く

（神と清神二國の海軍とを併しとす）

三、清國と對して露國の附屬に、從て我對清地境と  
不壞せしむ。

露人と滿洲の關係に對するの利

一、我國の進路を開く

二、露國の準備未しゆるに對して我よ

三、清國と我の衝突を避く、從て露國と防くは其力を用

いふことを得且つ清國の大局日本の勢力と注入し得

へし

に、吾邦保全ノ政策ヲおぼ

上、露國と防くは遠く神境に於て吾邦と遠く滿洲の境

に於てすべしと爲へし

第六、我と親露の關係に對する滿洲

是れ我と露の二者を尤も我親露の地と爲す

此地方の我親露の地と爲すは、露の南侵を永久に阻止すべし

○滿洲の地位

一、滿洲と吾邦との關係に、里江沿海二州と後貝加爾地

方及本國との關係に於て、且つ此等の地方を其の是

す。所來として其地位を其の是と爲す。近年は糧食と滿

洲の關係に於て、仰く、故に其の關係に於ては、二州の位

置を大に圖説すべし

二、滿洲の地位を其の是と爲すを併吞し得へし

三、滿洲の地位を其の是と爲すは其の是なり

四 北条：近きか故に支那に對し、至大の戦力と擇ぶと  
收へし

才七章 彼我兵力の比較

（以下はしり洋行）

才八章 露路兵力今後の比較

一 露は千八百九十八年より九千一萬留と收し七年計畫と  
之は海軍の擴張に際しせり 露軍の年限に際し此  
計畫は明年と以て完結すし此計畫に依り製造し  
軍艦中 オベール、レトウガン、ウエーサレウク、  
三世号（以上ソレル）幾艘、其中上の三艘は在東  
洋艦隊中に加算すの如く既に竣工したるものあり  
其後の艦隊も既に竣工の期に迫りたるものあり此計  
畫中の艦隻は幾艘に對し八隻あるものあり  
と豫め製造中のもの四隻あり  
又六千五百噸ノ二等巡洋艦九隻（此巡洋艦は次



二、是年くる三等巡洋艦を七年計畫内なる中約と外  
りし中約(若干)の製造より若干とりしか、其中「バ  
ルラー」が「カア」に二艦を既て竣工して東洋に廻  
航し、造中のもの為七隻あり

三千噸級の三等巡洋艦六隻製造より若干は  
せりが其内「ボヤリー」に「バー」を既て廻航  
し、これを製造中のもの為四隻あり

七千八百噸の一等巡洋艦「バヤリー」は既て竣工  
し、たりと聞く此艦は東洋に航の船定ありし、故  
に東洋艦隊中に加算せり

製造中の駆逐艦は共枚数と多し、本年の海軍

と年表に「レヤク」止の相違あり、記載す所は、  
又、各四百二十噸の駆逐艦三十隻と比ぶ、若し  
云ふ

二、西暦七年計畫未と終らざるに、又、その製造計  
畫と相違あり、報道か、海軍年表に見ゆ、此計  
畫にて各一千六百噸の駆門艦五隻、大巡洋  
艦三隻を造る、若し「レヤク」止の製造と比  
べ、一、隻の増、既て「カア」に「バヤリー」島造船所  
にて製造より若干あり、亦同年表に見ゆ

三、西暦利東清兩海運に既て全通し、これと「バヤリー」  
運河線及興安嶺海運未と、前成より、其他海路

上不便の處多く此等も軍隊輸送上の大なる障  
 礙なり此等も亦大なる力ありテ兵の精命を傷  
 れてバイカン近道線ニ工費と急ぐ所ハ如く半工  
 下と云ふ又此等山嶺隧道も亦東國通すと云ふ此  
 等の工も完成せる本國との連絡一氣快通すべし  
 四 哈爾濱、タリキ、龍口、遼陽等ニ於ける細路  
 成らざる事固より侵略運轉の根柢ト認めらるべし

此等の不便を略一ヶ月三週擴張せしむるとも一年平均二カ  
 月以上上らざる軍艦と加ふるに過す可き  
 予の意見 戦後の處分ニ於ける意見ニ詳なり

主戦論餘談

○最近四世紀百餘ノ侵略したる後土を運集するに一日平  
 均百三十平方キロメートルに及びたり

○西伯利鉄路敷設費 七億五千万兩

コウチ年額 十三と千兩

延年 五千九百九十回

○日本海支那海の海峡に大砲架銃下ニ在り仰

日本海

津軽海峡 馬場海峡

宗谷海峡 口高海峡

樺太海峡、千島海峡等亦これと便便少る

東支那海

・ 香港海峡の鎖鑰は澎湖島及び中環

・ 青島海峡

日本と大陸との間に在る両海の咽喉

・ 朝鮮海峡

以上諸海峡の中各一個の良港湾と有す

津軽海峡内

函館、大港、青森

馬関海峡内

門司、馬関

釜津海峡内

那珂港、厦門、福州、泉州、四洲港

三都澳

高島、新島、五島海峡

馬山浦、新島浦、釜山、新島

佐世保、博多

日本の之と利用する地

日本海方面

舞鶴と軍港とし 大港、馬関と

東支那海

東支那海方面

佐世保と軍港とし 那珂港と大港

対馬、朝鮮海峡

竹島、重要港と有す

即ち日本は両海に於て六個の海軍根據地と有す

之を討つて尙ほ二個増え一個と有す。是を討つ、其他し

一も有す。英の露海軍を論ずるに及ぶ

日本の考慮

・ 韓国の人口は四千五百万に達し、去年は四十五万完

増殖す。故に百五万と有す。故に一億に上らんとす

現在人口半七〇八分五厘に在るに土地は田七畝一畝  
すものあり

此の耕地の面積水田約二百八十戸所、畑約二百  
三十戸所あり、合計五百余戸所ありに過ぎず

之と全國八百萬戸の平均を均分すれば一家の所有  
地水田三反三畝余、畑二反八畝余に過ぎず

其收は米麦雑穀と合せば百二十十月より百七十月の  
間にたり、如何の多くは積りし二百万石と越えざらんし  
年々の程なほ

増加す

土地と併り地味に増進す

小作人も

故に田舎に窮乏を

根津一氏對露之戰論

第一 時局の大勢

第二 開戦の時機

前略 露國の陸軍は全國の戦時兵員約二百一十万人を  
 其大部分を歐洲及西亞中立の各方面に充てしめ  
 任するにシテ其東亞に充てる兵力は滿洲の各所及  
 新に烏拉里、濱州に散在する約十万人に過ぎず  
 (中略) 俄國は烏港及ニコリスク附近に於て開戦するモノト  
 想定せざるに於て其外滿洲各所の守備に充てる者  
 ・ヲ前記十万人中より撤除せざるべからざるが故に  
 戦地は運  
 用し得べきモノは多く見積るに五万人以上に出らるべし

此五万人ヲ分給信ニ送刺スル時ハハ各モ迅速ニ足積ル  
・勅令後二十七日ヨリ以内ナルヘカラス

次ニ他方ヨリ送送スヘキ部隊及共到着期ヨリ查ス  
ルニ中ニ細立ノ兵ハ對英艦備上之と勅カスヲ得ス  
共勅カスモ甚チク尤モ便利ナルノハ莫斯科附近ノ  
総隊備兵三十一カノ中ニアラセカ

今其協送極難ク按ズルニすれち各人すく以東は黒  
龍江ノ水路ニ由ルハ哈爾濱ヲ經テ鉄路ニ由ルニ到着  
ノ迅速ニ大差ナキヲ知ル

莫斯科ヨリニコリスクニ至ルニ成鉄道七千七百六  
十海里トイルクーツクヨリムクソーヤ間ノ道

程(鐵ヲ未成)ト其現時ノ運搬力ト由リニコレ果  
スルニ其到着ノハ較水路ニ由ルニ異相同じ

仍テ今莫斯科スレケシク同ヲ汽車ニ由リ次ニ黒龍  
江ノ水路五万里日不船ニ由リハハローフスル附近

ヨリ鳥院着クハニコリスク附近ニ至ルニ再ニ汽車  
ニ由テ一軍團ノ兵團員約二三戸非敵兵ヲ輸送セ

ニ精確ナル調査ニ據ルハ少クトモ六十六日ヲ要スヘ  
ク更ニ一軍團ヲ運流セニハ更ニ六十六日ヲ要シ仰

テ勅令開始ノ當日ヨリ百三十二日ノ後ニ非ンバ今  
就地内ニ入ル能ハス是レ到底初期ノ支給ニ参  
与シ得ザンモノト知ルヘシ

破ミテ我軍進征ノ日程ヲ安カスルニ海路直子ノ命  
我地ニ上陸スルト釜山附近ニ上陸シテ陸路命我  
地ニ赴クノ二途アリ陸路命我地ニ赴クトスルニ其時  
日ノ僅少ニ到者ノ迅速ナルハ途ニ宿軍ノ及ツ所ニ  
テラス殊ニ割侮獲リ我ニ収メテ海路輸送ノ安全  
ヲ得タル協合ノめキハ其ノ爲到ノ更ニ神速ナル中國ヨリ  
論テキリノ之ヲ要スルニ其爲ニ不便ナル釜山以北  
ヲ陸ニ破ル切合ニ在テモ六個月用ヲ運用シニ確  
乎ハん謀策ヲ立ツルハ向ヘテ陸海孰レノ道ニ  
由ルニ其ノ要我ノ時極ニ速テ其兵力欲ニ比シ倍勝  
ノ位至ニ立ツラ得ヘシ向ニテ欲ノ此不利ナル形勢

ニ在ルニ全ク其交通治者ノ不便ニ職由スルモナリ  
吾ハ宿ノ派遣軍隊カ黑龍江流ヲ全然利用セル協合ヲ  
假想シん計算ナレトモ實際ニ此ヲ之ヲ計ルハ更ニ宿  
軍ニ不利ナルモノアラン何トレハ則チ黑龍江ノ利用  
期間ハ毎年五月中旬ヨリ十月中旬ニ至ル六ヶ月  
ニ止マリ他ノ六個月間ハ結氷流氷ノ障礙ニ因リ舟  
ハ行ヲ通スル能ハサレハナリ今若シ江流不通ノ期間  
ニ當リ己ムラ得スレテ陸路ヲ進行スルモノトセンカ  
少クトモ一四十日ヲ要スニアラスレハ命我地ニ達  
スル能ハス誠ニ是ノ如クハ派遣部隊ハ到成初  
期ノ交戦ニ与カルヲ得スレテ敵軍ノ合戦力ハ單ニ

前通ノ五才人ニ過シテ依令我軍之ニ當ルニ依  
ニ四伯師團ヲ以テスルモ已ニ其兵力ノ優劣在ラ  
ルニナリ

又九月一日勅命合テ及ニ星野江流ヲ一節  
利用スルモノトセンカ其結氷期十月十五ヨリ四十  
五日中勅命ノ準備ニ要スル十日ヲ扣除セテ餘又所  
ハ僅ニ三十者ニ過キス若シ派遣軍中戰鬥部隊  
ニ要スル後方勤務ノ人員ヲ包含スルモノトセハ此ニ  
十五ヨリ以テ送山スヘキ戰鬥兵ノ他概ハ約一萬三千  
人ノ上ニ出テス采シテ此ヲ初期ノ交戦ニ充テシテ  
軍ノ全カニ前通ノ五才人ト此一萬三千トニ當ルモノ

ニシテ我軍之ニ當ルニ五伯師團ヲ以テスル則チ強  
ト一伯師團ノ優劣トナルヘシ

且ツ星野江ノ輸送力ヲ要スルニ一週年ノ總量僅  
ニ人十二万口、馬四万匹ノ糧食ヲ運致スルニ過キ  
ス者ナラズ糧食ノミハ漕運ニ充テ、尙モ人馬ノ接  
戦ヲ難ヘサルモ其輸送力ノ微弱ナルヲ猶モ此ノ如  
シ又ガバヤカン星野江沿海州及鳥之籠里一帯  
ニ在ル各種品ノ産出額ヲ要スルニ該地方位  
民ノ需要ニ對シ毎年一千カゴード以上ノ不足  
ヲ生シ而シテ是補充量ノ供給ハ實ニ滿洲  
米國及我日本ニ之ヲ仰ク也亦以テ現下ノ交戦



ニ於テ露軍ノ輸送給小費ニ困難ヲ往ルヲ推  
知スヘシ

以上ノ唯一例ヲ取ツテ又通商出ルノ便宜ノ如何ニ  
化驗上ノ利不利ニ關係ヲ来ルヤノ一斑ヲ察示ス  
ルニ過キス而シテ吾國實情ニ在リテハ露ノ海軍  
万里終極權ヲ逞ニ其國陸軍ノ設備ニ比シテ  
ニモノテラニ殊ニ信スヘキ調査ニ依ルニ露ノ海軍  
ヨリカイダロワニ五ニ鉄砲ノ運搬力ニテラ  
ニ休養兵ノ輸送ノニニ用ユルモ僅ニ人二十万  
ノ信用ニ充ツルヲ得ルノニ果シテ此ノ假ニ滿洲  
及里如江島薩里一帶ノ全駐屯軍ノ信費

取ラ全額本國ヨリ輸送スルモノトセハ露國ノ信費  
上ノ關係ヲ算兵十五万 駐屯軍二十万中、兵十五  
萬、北極兵五万ト假定  
又以上ノ演地帯ニ屯在スル兵ハサレヘシ之ニ因ラ之  
ヲ觀ルモ露ノ東亞ニ於ケル心算ニ於テハ其守戍  
地ニ用ヤルヘキ戦力カノ甚ト大ナル能ハサルヲ知ル  
ヘシ (下略)

亦ニ戰船及軍費

○対露心算上船日標急ニ迫ルハ旅順、烏港、哈爾濱、  
三處通ル徑路僅ニ數點ニ府トス旅順ノ如キ今ヨリ互  
リテハ船脚ノ防費甚ト凶キ故ニ対露心算ノ一取為ハ  
ニツリスリ附近着クハ哈爾濱方面ノ要路ニ在ルヘシ

若此交我社の勝利に際せんか宜しし軍ノ主力と極要ノ  
一地ニ集メ過シ宜ノ他ニ協防の條條と爲シテ以て我  
敵動息と多敷ナラシメ敵兵若シ来ラハ後防ヲ以テ  
之ヲ粉砕シ隨テ来レハ隨テ碎キ遂ニ互ニ来レ能  
ハサレハ心ルマテ攻勢防禦ヲ保テスルニ願フニ現  
時、北邊ニ於テハ輸送ノ不便給ルノ國境各般設  
備ノ缺失ノ爲ニ尙軍力我ニ對シテ優劣ノ兵費  
ヲ増派シ得ルハ要門兵費ノ統一ある所也故ニ是レ  
我軍ニシテ一而計我持久ノ爲ニ於テ旅順方面ノ  
至急ヲ施シ一而進攻防守ノ外ニ於テ朝鮮半島  
ノ經營ヲ了セハ我軍告退ノ方ヲ執ル久國難

要國空ノ却ヲ行ハスレテ後々令馬ノ終ヲ制スルヲ  
以ヘン

是ノ爲テ之ヲ計ルニ我若シ十個師團ヲ爲シテ征伐  
ノ行ヲ爲シタ共一アハ之ヲ朝鮮内ニ留メ他ノアハ  
ハ敵軍ノ怯弱ヲ知レテ滿洲東部ノ地我ニ之テ  
必者ノ目的迄宜シキ紙ヲ以テ之ヲ運用セシ  
半年内ニ於テ心算ノ一版爲ラ結フニ難カラス

中略

初期ノ交戦ニ半年ヲ充テ計我持久ノ期百ニ一年  
乃至一年半ヲ推シ通計二年ノ年月ヲ費スハ後  
ニ完全ニ終局ヲ決ラシ送ラシ

下略

軍費

征伐ノ後ノ暇ニ二年経過スルモトスレハ多ク  
七四億五千万圓ニテ十分ナラシ

此軍費ノ半分ハ邦人ノ手ニ為ツルモノナレハ国力

衰耗ノ憂アリ

軍費削減ノ方ハ

一時借入金

預金奨励

大元証券

修町増設

公債發行 等 絶ニあり

別一表ニテハ

先ツ公債準備 一億五千万圓

ノ内ヲ備用して取用ノ需申ニ充て次ニ内國債ノ募

集ニ着手ス

廿七八年段ノ際ニハ軍事公債一億五千万圓

ヲ募集しわたり

右ニ取一億と募集し為ホ二年目ニ二億一千万

圓債ヲ募集し得ヘシ

殊ニ一億五千万圓ハ「或ハ外債ニ「或ハ内債ニ

「或ハ臨時増設ニ「或ハ其他ノ方ハニ取ルヘシ

万一「此ノ方ハ先換ヲ停止スルモ可ナリ

丁巳  
法端



